

第八部 イザヤの小黙示録

イザヤ 24 章～27 章

□ アウトライン

- | | |
|-------------|-----------------|
| A) 大患難期 | 24 : 1～23 |
| B) 賛美の歌 | 25 : 1～12 |
| C) 救いの歌 | 26 : 1～19 |
| D) イスラエルの回復 | 26 : 20～27 : 13 |

□ 「 A) 大患難期 」 のアウトライン (イザヤ 24 : 1～23)

1. 世界に対する神のさばき (24 : 1～13)
2. 世界的規模での宣教 (24 : 14～16a)
3. 再びさばきの預言、地の荒廃 (24 : 16b～20)
4. 大患難期の後 (24 : 21～23)



新約聖書の黙示録の構成

- | | |
|------|-------------|
| 6 章 | さばきの預言 |
| 7 章 | 世界的規模での福音宣教 |
| 8 章～ | さばきの預言 |
| 20 章 | 大患難期の後 |

A) 大患難期 24 : 1～23

1. 世界に対する神のさばき (24 : 1～13)

(1) 神のさばきが全地に下る (24 : 1～4)

24 : 1 見よ。主は地を荒れ果てさせ、その面をくつがえして、住民を散らさせる。

- 主は・・・地を荒れ果てさせるのは、主である。ここで預言されるのは、神のさばきがこの世界全体に下って、その結果、地上は荒れ果て、住民が散らされ、その人数も少なくなる、ということ。
- 地面をくつがえす・・・誇張的表現かもしれないが、大患難期の後はメシアの王国、その建国時点では地球上の地形が大きく変わっているので、まさに文字通り、地面がくつがえるほどの劇的変化が地上で起きるのかもしれない。

24 : 2 民は祭司と等しくなり、男奴隷はその主人と、女奴隷はその女主人と、買い手は売り手と、貸し手は借り手と、債権者は債務者と等しくなる。

- 民と祭司、男奴隷とその主人、女奴隷とその女主人、これらは社会的身分の階層。
- 買い手と売り手、貸し手と借り手、債権者と債務者、これらは経済的階層。

- 「等しくなる」とは、人間社会の日常的な活動ができなくなって、階層の区別がなくなってしまうということ。

24 : 3 地はすっかり荒れ果て、すべてかすめ奪われる。主がこのことばを語られたからである。

- 原文はもっと強い口調。直訳すれば、「荒廃！ 地は荒れ廃れるであろう。剥奪！ 地は剥奪されるであろう」

24 : 4 地は嘆き悲しみ、衰える。世界はしおれ、衰える。地の最も高貴な人たちもしおれる。

- 地・・・ヘブル語「テベツ」、約束の地、または、地上一般を指す。ここでは、「世界」の同義語として使われているので、地上一般。
- 世界・・・ヘブル語の「テベル」、人が住む地域を指す。人の居住地域がしおれるとは、人口密度が極度に低くなる、ということ。そのように地上を荒れ果てさせるような神のさばきが下る原因は何か、それが次に語られる。

(2) さばきの原因は、人が地を汚したから (24 : 5～6)

24 : 5～6 地はその住民の下で汚されている。彼らが律法を犯して定めを変え、永遠の契約を破ったからである。それゆえ、のろいは地を食い尽くし、その地の住民は罰を受ける。それゆえ、地の住民は減り、わずかな者だけが残される。

- 律法 (複数形)・・・一般法
- 定め (複数形)・・・特別法、様々な分野の具体的な規定
- 永遠の契約 (単数形)・・・ノア契約 (創世記 9 : 1～17)
 - ① 子を生み、増えて、地に満ちよ (都市に集中せず、広がって住む)
 - ② 獣、鳥、魚、すべての生き物には、人への恐れとおののきが起る。生き物は人の手に委ねられた。(それゆえ、生き物たちを正しく扱い、資源を用いること)
 - ③ 緑の草と同じように、動物も食用にしてよい。
 - ④ ただし、血のあるまま肉を食べたり、血を飲んだりすることは禁止。血は、肉のいのちだからである。
 - ⑤ 人の血を流す者 (= 計画的に故意に人を殺す者) は、人によって血を流される (= 死刑に処せられる)。そのためには統治機構、警察組織、刑法、裁判制度などが必要。ノア契約は、神が法と公権力による統治支配を全人類に命じたものである。
- 大患難期での神のさばきは、人類がノア契約を破り、地上を汚したことが

原因である。ノア契約では、神は二度と洪水で人類を滅ぼすことはないと言約束された。それゆえ、大患難期での神のさばきは、水によらず、火によるさばきとなる。⇒ II ペテロ 3 : 7、10～12

(3) 地上から笑い声も音楽も消える (24 : 7～12)

24 : 7～9 新しいぶどう酒は嘆き悲しみ、ぶどうの木はしおれ、心に喜びのある者もみな、うめく。陽気なタンバリンの音はやみ、はしゃぐ者たちの騒ぎも消え、陽気な堅琴の音もやむ。歌いながらぶどう酒を飲むこともなく、強い酒も、飲む者には苦い。

- ぶどう酒がなくなる。音楽が聞かれなくなる。宴会の楽しみもなくなる。残っている強い酒を飲んでも、心に喜びはなく、苦いだけ。

24 : 10～12 都は壊されて荒れ地となり、すべての家は閉ざされて入れない。街には、ぶどう酒はなく、哀れな叫び声がある。すべての喜びは薄れ、地の楽しみは取り去られる。その都にはただ荒廃だけが残し、城門は打ち砕かれて荒れ果てる。

- 都・・・エルサレムではない。「すべての家は閉ざされて入れない」という状況になるのはバビロンである (13 : 20～22) から、この都はバビロンかもしれない。ただし、10～12 節は、地上の荒廃ぶりを示すために、ある町にフォーカスをあてての描写。特にバビロンだけが荒廃するという限定的な預言ではない。次の 13 節には、「諸国の民の間で」とあるように、地上の人間の町々がこの都のように荒廃するという預言である。

(4) まとめ (24 : 13)

24 : 13 まことに、大地の真ん中で、諸国の民の間で、オリーブを打ち落とすようなことが、ぶどうの収穫の後に取り残しの実を集めるようなことが起こる。

- オリーブを打ち落とすようなこと・・・木に残るオリーブの実はずか
- ぶどうの収穫の後に取り残しの実を集めるようなこと・・・わずかな房だけがぶどうの木に残る
- わずかな数の人間だけが、さばきの期間を生き延びる。10～12 節で描写された都で起こることが、「諸国の民の間で」、すなわち全世界で起こる。

2. 世界的規模での宣教 (24 : 14~16a)

24 : 14~16a 彼らは声をあげて喜び歌い、西の方から主の威光をたたえて叫ぶ。それゆえ、東の国々で主をあがめよ。西の島々で、イスラエルの神、主の御名を。地の果てから、私たちは、「正しい方に誉れあれ」というほめ歌を聞く。

- 西の方から、東の国々で、西の島々で、地の果てから・・・大患難期において神のさばきが地上に下るが、同時に全世界各地で主の栄光をたたえる喜びの声があがる。彼らはユダヤ人ではなく、異邦人である。
- 私たちは、「正しい方に誉れあれ」というほめ歌を聞く・・・「私たち」とはユダヤ人、イスラエル民族の人々である。異邦人たちが救われ、全世界でイスラエルの神、主の御名をほめる賛美の歌声があがるのを、イスラエルの人々が聞く。地上からぶどう酒がなくなり、笑い声が聞かれなくなるという中で、世界各地でイスラエルの神を喜ぶ声があがる。これはイスラエルの人々の心を動かし、イエスをメシアであると認める方向に導く要因のひとつとなるであろう。
- では、誰が世界各地で異邦人を救いに導くのか。教会の信者たちではない。大患難期の前に教会の信者たちは天に携挙されて、地上にいない。黙示録 7 章によれば、大患難期が始まる時点で、主は世界各地に総勢 14 万 4 千人のユダヤ人信者を起こしておられ、彼らが患難期の前半、3 年半の間、世界各地で福音宣教を行い、多くの異邦人が信者となる。
- イザヤ 24 : 14~16a の預言内容を、より具体的に預言したのが、黙示録 7 章である。

3. 再び裁きの預言、地の荒廃 (24 : 16b~20)

(1) 神のさばきから逃れることはできない (24 : 16b~20a)

24 : 16b しかし私は言った。「私はだめだ、だめだ。ああ、悲しい。裏切り者が裏切った。裏切り者が裏切り、裏切った。」

- 私は言った・・・イザヤは自分を大患難期のときの人々の中に置いている。外側に立って見ているのではなく、大患難期での神のさばきの中にある一人として言った。
- 裏切り者 (複数形)・・・人々が自分の身を守ろうとして互いに裏切り合う

24 : 17~18a 地上の住民よ。恐怖と落とし穴と罠があなたに臨む。その恐怖の叫びから逃げる者は、その落とし穴に落ち、落とし穴から這い上がる者は、その罠に

捕らえられる。

- 恐怖と落とし穴と罠・・・3つの用語を使って、さばきから逃れないことを強調している。ヘブル語では「パチャド、パチャト、パチ」、音合わせもしている。

24 : 18b～20a 天の窓が開かれ、地の基が震えるからだ。地は割れに割れ、地は破れに破れ、地は揺れに揺れる。地は酔いどれのようによろめき、仮小屋のように揺れ動く。

- 天の窓が開かれ、地の基が震える・・・ノアの洪水のときには、天では「天の水門が開かれ」、地上では「大いなる淵の源がことごとく裂けた」（創世記 7 : 9）。大患難期は水によるさばきではなく、火のさばきであるが、ノアの洪水のときと同じように、火は天からも降り注ぎ、地上からも噴き上がるであろう。逃げ場がない。

(2) 悪しき者たちの結末 (24 : 20b)

24 : 20b 地の背きはその上に重くのしかかり、地は倒れて、再び起き上がれない。

- 地の背き・・・世界的規模での神への反逆である。神と人との間での永遠の契約（5 節）＝ノア契約に対する違反である。その背きが「地上に重くのしかかり」とは、神のさばきによってその背きが倒されたということ。
- 地は倒れて、再び起き上がれない・・・「地は」⇒原文は「それは」、「地の背き」を指す。「地の背き」、すなわち神への反逆は、神のさばきによって倒され、二度と起き上がれない。大患難期の目的のひとつは、悪を終わらせ、悪人を地上から除くこと（ダニエル 9 : 24）である。その目的が達成される。

4. 大患難期の後 (24 : 21～23)

(1) 二つのグループが罰せられる

24 : 21 その日、主は天では天の大軍を、地では地の王たちを罰せられる。

- 天の大軍・・・墮天使たち（サタンと悪霊たち）
- 地の王たち・・・人間の権力者たちで、神を信じなかった人たち

(2) 二つのグループが閉じ込められる

24 : 22 彼らは、囚人が地下牢に集められるように集められ、牢獄に閉じ込められ、何年かたった後に罰せられる。

- 囚人が地下牢に集められるように集められ・・・地下牢は直訳すると「穴」、よみを指す。人間の権力者たちは、死んでその靈魂はよみに下る。彼らに対して死の罰を下す判定は、メシアが再臨後に地上で行うさばきにおいてなされる（マタイ 25 : 31～46）。
- 牢獄に閉じ込められ・・・悪霊たちが閉じ込められる場所は、他の預言に照らすと、地上に 2 か所、設けられる。エドム【南ヨルダン】（イザヤ 34 : 9～11）とバビロン【南イラク】（イザヤ 13 : 19～22、14 : 22～23）である。サタンは、よみの中の「アビス」に閉じこめられる（黙 20 : 3）。
 - よみの中には、次の 4 つの区分がある。
 - ✧ 旧約時代の信者たちの靈魂が行っていた場所（アブラハムのふところ、パラダイス）。彼らはイエスの昇天のときに天に連れていかれたので、今は空っぽ。パラダイスは、今は天にある。
 - ✧ 神を信じないで死んだ人たちの靈魂が行く場所
 - ✧ 墮天使を一時的に閉じ込めておく場所（**アビス、底知れぬ所**）
 - ✧ 創世記 6 章の罪を犯した特定の墮天使たちを永遠に閉じ込めておく場所（タータラス、ユダ 6「暗闇の下」）
- 何年かたった後に罰せられる・・・メシアの王国が千年間続いた後、「大いなる白い御座のさばき」がある。いわゆる最後の審判である。このときに、神を信じなかった死者たちの靈魂はよみから呼び出され、死ぬことのない体によみがえり、神の御座の前でさばかれる。そして、火の池に入れられる罰を受ける。サタンと悪霊たちもそのさばきで罰せられ、火の池に投げ込まれる。この火の池は、本来、神がサタンと悪霊たちを最終的に行かせるために準備した場所（マタイ 25 : 41）である。

(3) 結びのことば メシアの王国における主イエスの栄光

24 : 23 月は辱しめを受け、太陽も恥を見る。万軍の主がシオンの山、エルサレムで王となり、栄光がその長老たちの前にあるからである。

- メシアの王国の時期には、太陽の光は今よりも強くなり、そのためそれを反射する月の光も強くなる（イザヤ 30 : 26）。そのような月の光や、太陽の光さえも、主の栄光によってかすむ。
- イスラエルの長老たちは、王なるメシアの栄光を浴する。